

琴湖*のほとりに

暮らす人々

No.4

豊かな自然に囲まれた自給自足の暮らしと、コミュニティの絆がしっかりと息づいているまち。その魅力を明るくてあったかい琴海人(きんかいびと)を通して描くことをこころみるシリーズ。第4回は地域でなりわいをつないでいく山崎さん一家。



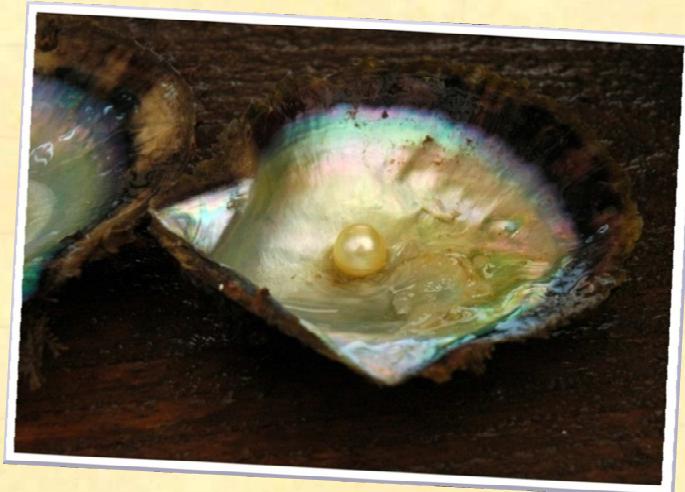
* 昔大村湾は、「琴湖(キンコ)」もしくは「琴の海(コトノウミ)」と呼ばれていた。名づけの由来は、波の音が琴をつまびいでいるように聞こえたから、とも。湖のように静かなので京都の「琵琶」湖に對して、とも。長崎市の、西彼杵半島(ニシソノギハントウ)の、大村湾に面した土地が旧琴海町(キンカイチヨウ)です。

【写真 1】養殖筏の上で親子二代。1代目久之さん(72)と2代目久徳さん(47),2013,2(撮影:平井杏奈)

February 20, 2013

Dear Elly

琴海に移り住んでからもうすぐ半年。ことは、食べもの、暮らし方、人との距離感とすべてのことが私のいた街とちがって驚いていたけれどようやく少し落ち着いてきました。琴海弁もだいぶわかるようになってきたよ。けれどもまだまだ毎日発見！今回は、新しくご縁のあったステキなモノコトヒトについて書くね。大村湾の真珠養殖と山崎さん一家について。



【写真 2】貝から出てきたばかりの真珠、以下全て 2013.1(撮影 ; 平井杏奈)

はじまり

真珠の美しさは、人の手仕事と貝のいのちと海の美しさの結晶。オーストラリアの白蝶真珠も、タチヒの黒蝶真珠も、中国の淡水パールも、大きさや華やかさや色の豊富さなど、それぞれの美しさを持つ。日本のアコヤ真珠のアイデンティティー、照りと呼ばれる透明感のある輝きは、四季の変化に富んだ海で職人たちの手によってひとつひとつ丁寧に育てられる。

人魚が流した涙。竜の落とした宝玉。零れ落ちた月のしづく。貝の腹からごくごく稀に見つかる淡く輝く珠を昔の人はそう呼んだ。貝が真珠を作るメカニズムが明らかになる前、天然の真珠はとてもめずらしく、何万個の貝からひとつ、ふたつと現れる美しさの来歴にとめどなく思いを巡らしたのだろう。西洋では富と神秘の象徴として王侯貴族の冠やフェルメールの描いた少女の耳元を飾り、日本では献上品や薬として使われていた。

真珠養殖のはじまりは、明治 26 年のミキモトパールの創始者御木本幸吉の世界ではじめての半円真珠の養殖の成功⁽¹⁾。日本の真珠養殖業はここから産業として幕を開けパリ裁判⁽²⁾

(1) 貝が真珠を作るメカニズム／貝に核となる玉とピースと呼ばれる外套膜をいれる。貝は身を守るために外套膜から真珠質を分泌し、核に沿って真珠層が形成される(巻く)、そうして幾夏と幾冬を超えて真珠が出来上がる。

(2) 1919 年(大正 8 年)のミキモトの海外市場の進出に対して、ヨーロッパ社交界と宝石商が「養殖真珠はホンモノの真

を経て世界の真珠市場を席巻するようになる。その後、御木本の娘婿の西川藤吉が真円真珠の養殖に成功。西川氏は長崎の大串で事業を始め、同時期に真円真珠の技術を発見した貝瀬辰平も長崎県の大村水産養殖場に着任。真珠養殖が日本の外貨獲得手段として奨励される中で、琴海でも昭和26年には長浦村に県立真珠研究所が設置され、地場の真珠養殖業がはじまった。

人の手と貝と海の力 いきもののつくる宝石

長崎は、三重、愛媛とともに日本の3大産地。バブルのころより少なくなったものの、現在も琴海では7軒の真珠養殖業者⁽³⁾が生業を営んでいる。大村湾に来れば冬から春先にかけて、静かな海に点線を描く浮き球を見ることができるだろう。穏やかな波の下では、浮き球につられた筏の中で貝が日々大きくなっている。

7軒の真珠養殖やさんのうちのひとつ、山崎真珠さんの作業場にお邪魔させてもらった。海の上の作業小屋に入ると、地元のお父ちゃんお母ちゃんたちがテキパキと手を動かしていた。浜上げしたばかりの貝をひらき、貝殻と身と貝柱とに分ける。そのあと真珠を取り出し何度も水で洗い、どんどん選っていく。形がよく、キズがなく、巻き(形成された真珠層の厚さ)と照り(真珠層の結晶による干渉色の強さ)とが美しいもののみを選別。そのうちおよそ1割が花珠⁽⁴⁾としてネックレスや指輪になっていく。

1代目の山崎久之さん曰く、花珠の中でもとびきりいいものは100個にひとつ、ふたつという具合にしか出てこないのだそうだ。あくまでも自然のつくるものだから、その年の天候によって出来が違う。海によっても違う。人間にできるのは貝が気持ちよく育てるよう環境を整えること。



【写真3】ナイフによって貝殻と身と貝柱とがみるみる分けられていく。

珠ではない、ニセモノだ」と法廷闘争になった。オックスフォード大やスタンフォード大の科学者らの鑑定により「違いは中心核の導入が自然にか人工的にかだけ。真珠層そのものに違いはない。同一の価値を持つもの」とされ勝訴。

(3) 琴海真珠(養殖)、長浦真珠(養殖)、深江真珠(養殖)・長崎真珠(加工・販売)、平尾真珠(養殖)、丸宣真珠(養殖)、溝口真珠(養殖・球出し体験)、山崎真珠(養殖・加工・販売) (あいうえお順)

(4) 花珠の品質

真珠の中でもとびきり美しいものと言う。ダイヤモンドとちがって真珠には業界全体のランク制度は今のところない。このためどれくらいの美しさを持って『花珠』とするかは養殖業者やブランドごとに違う。

稚貝から母貝を育てるのに約2年、母貝に核を入れてから真珠が育つのに2年から3年。その間、週に一回は海から揚げて貝の掃除をする。2代目久徳さんは「嬉しいのはゴマ粒よりも小さい貝が、病気になることも死んでしまうこともなく、無事に大きくなっていくのを見るとき。一番キツいのは貝が死んだとき。五島でしようたとき、電話がかかってくるとどきっとしようた」ともらした。丁寧に海と貝にひたすらまっすぐに。長年の努力の結果、平成24年度の全国真珠品評会では水産庁長官賞を受賞している。

いいものを適正価格で

真珠の価格はmm数で決まる。たとえば8mmの核を入れれば巻きは薄くてもお金にはなる。けれど7mmの核を入れて同じ大きさまで育てることでしっかり巻いた照りの美しい珠ができる。久之さんの憂いでいることは「真珠は真珠でも花珠とはいえない珠が、花珠の名前で売られるようになったこと」。『花珠』と名がつくと高く売れるので、高いけれど品質はそれほどでもない珠や、安いけれど本物の真珠とは言い難い珠が、市場にでていることもあるという。「時間はかかるけれど、珠のよかとばつかったがよかバイ(いい珠をつくるほうがいい)」。

いい真珠を知るためににはやはり「見て目を肥やすこと」。2011年には久之さんの三男の興介さんが加工販売をはじめた。ネックレスの他、数珠、ペンダントやスマートフォンピアスなどをつくっている。実際に解説してもらいながらじっと見ていると、一つ一つの真珠は少しづつ表情が違う。でも最後は「買うもんがきれかと思えばそいがよかさ(買う人がきれいだと思ったらそれがいい)」。人もジュエリーもご縁。ピンときたら出会いなのでしょう。

フェイクパールのアクセサリーを買うのなら、せっかくやし琴海でほんもののジュエリーをみるのはどうかな?生産者価格だから女子会でのプレゼント交換とか、ちょっとした贈り物にもいいかもしれないよ。私に出会ったのもきっとなんかのご縁やっけん(だから)、まあ一度、琴湖のほとりに遊びにこんね。



【写真4】空を映す穏やかな海、物語はここからはじまる

【写真5】
パールサロンにて興介さん(39)と
母律子さん(72)



ゴールドのような華やかなインパクトではなく、シルバーのようにシャープな洗練ではなく。柔らかく穏やかに照る真珠のジュエリー。ケースのむこうのきらめきは、シャイな人がふっとほころぶように笑ったときに似ている。琴海の人たちの笑顔みたいだ。

Lots of love Anna

参考文献：

- 琴海町教育委員会編「琴海町史」1991,琴海町役場
小松博・いなとみのえ「ニッポンの真珠がいちばん美しい」2012,織研新聞社
山崎真珠 website <http://store.shopping.yahoo.co.jp/yamasaki-shinju/index.html> (2013.2.14 閲覧)
長崎真珠 website <http://www.nagasaki-shinju.com/> (2013.2.14 閲覧)
ミキモト真珠 website <http://www.mikimoto.com/jp/> (2013.2.14 閲覧)

文責；長崎市地域おこし協力隊 琴海地区 平井杏奈

Access Map

